

GSI キャラバンプロジェクト

「小国」の経験から普遍を問いなおす

プロジェクト概要

経済、文化、言語などにおける「グローバル・スタンダード」の圧力とアメリカの覇権の揺らぎや新興国の台頭などともなう世界秩序の再編のなかで、ネーションをはじめとするさまざまな集合体のアイデンティティが問われている。本プロジェクトは、これまでおもに英語圏でなされてきた国際関係論などのグローバル・スタディーズには、しばしば「大国」の観点が自明のものとして持ち込まれ、また西洋近代的な「普遍」が前提とされているのではないかという問題意識を持ち、「小国」の観点から「普遍」のあり方を問いなおそうとするものである。鉤括弧付きの「小国」には、英語で言えば **small nations and collectivities** の意味を込めている。国連や世界銀行などの国際機関、また国際関係論や国際政治学などの学問分野では、**small states** という言葉が一般的だが、これだと主権国家に議論が限定されてしまう。本プロジェクトは、ネーションに比較的大きな焦点を合わせつつも、その範疇には必ずしも収まらない集合体も取り扱う。たとえば、大国意識を持つ国のなかの地方や地域、異議申し立ての社会運動などが考えられる。そのような「小国」には、しばしば近代化あるいはグローバル化の「歪み」が二重三重の形で集約されている。本プロジェクトは、そのような「核心現場」（白永瑞）を生きる経験に、人間の「普遍」に通ずるものが多様な形で現れるという見通しを持ち、それらの文脈と具体相を描き出そうとする共同研究である。

人間の文化を特徴づけるものとして、特に宗教と言語の二つを大きな柱として挙げるができる。英米両国を中心とする西洋近代が世界の覇権を握ったという歴史の文脈に大きく規定されている現在のグローバル・スタンダードでは、やはり世俗と英語の力が強いと言える。本プロジェクトは、「大国」に向き合う「小国」のアイデンティティ形成には、宗教や言語が大きな役割を果たしてきたとの認識に立ち、宗教やもうひとつの普遍語としてのフランス語およびさまざまな国際語や現地語の要素に注目する。

「普遍」を問いなおす本プロジェクトは、周辺から中心を揺さぶる、マイノリティの観点からマジョリティの論理を暴く姿勢を重視するが、両者の関係を単純な支配と被支配の関係でとらえるのではなく、双方向的な依存関係や相互交流にも留意する。一例として、世俗に対抗する宗教という図式を自明視するのではなく、世俗と宗教の二分法を自明視することができない地域における両者の再編の意味を再考する。もうひとつ注意しておきたいのは、「小国」もしばしば一定の大国化志向を持つということである。一方では、それは「ソフトパワー」としての魅力を構築し、国際社会

のなかで「ミドルパワー」の位置を模索する方向につながるだろう。他方では、「小国」の人びとの一部は、「大国」意識を持つなかで、内部のマイノリティに対して抑圧的に振る舞うことがあり、いわば「二重の植民地化」の状況が生まれることがある。そのような状況は、しばしば苦しみや痛みの経験をもたらすが、そこを生きる主体の重層的なアイデンティティに注目することで、マイノリティやマジョリティとは何か、普遍とは何かを改めて問うことができると考えられる。

本プロジェクトの主要メンバーは、伊達聖伸、鶴見太郎、張政遠、小川浩之、土屋和代の5人であり、いずれも駒場の地域文化研究専攻の教員である。思想史、宗教学、歴史学、社会学、国際関係論などの学問分野を背景に、イギリス、フランス、ロシア、イスラエル、アメリカ、カナダのケベック州、日本、中国（香港）などをフィールドとして研究を進めてきた。上記の問題設定を共有する海外の主要大学（香港中文大学、アメリカ・イエール大学、フランス・エクサンプロヴァンス大学、ケベック・ラヴァル大学など）の研究者たちと連携しながら、駒場を拠点とする新たな地域研究の可能性も探りたい。